朝夷巡嶋記 第一編 巻一

春

内閣書庫
番號 188
冊數 40

へ13
3093
16

曲亭主人著　第四編

朝夷巡嶋記

歌川豊廣画　文金堂嗣梓

昭和九年七月二三日　購求

吉田屋

吉田屋

朝夷巡嶋記第四編叙

夢中若樂非真情也然有甚於真情好讀稗史小說者亦與此相似其繙閲之際遇賢者薄命小人傲倖才子不稱時尚美人歸于癡漢等之事則扼腕浩嘆欷歔潤襟者有矣又遇奸邪發覺逆賊誅伏賢才應於徵聘孝節表于門閭等之事則欣然拊卷嗢噱終日者有矣顧其事毫無與於我身而意之所向不能自禁者何也蓋人性稟之于天天意好生而與善苟繙閲入其佳境得其情狀則坦然無私意於是乎雖婦幼理義分明善悪邪正豁

門へ13
號3093
卷16

如此天稟之性使之然也古之名人才子為稗史小說以勸善懲惡者故不深意存焉若夫拘執不通為者咎稗史小說之不合于正史以為誣世惑俗與所云不知夢之為夢而卜其吉凶悔吝不當則咎其夢曰無益於事者何以異之有或曰周禮春官大卜掌三夢六夢之吉凶周人取焉占夢國史及左傳所書尤多彼稗史小說君子所不取也子之言之悖得非誣罔耶余對之曰史傳所載夢想事出於當時小說大約夢之與小說其虛實相半周雖有占夢之官後世無傳其法者以小驗也

然一夕遇惡夢者終日不樂賢者因茲倍慎衆人依之些憚稗史之醒蒙昧也與虛夢之驚癡人一般昔人嘗有戲夢之喻非但戲場之似夢稗史小說亦可以喻夢而夢有脩短猶稗說有巧拙也自非情景寫得至極之才豈可得能使世俗感動為哉余性磊落不嗜為人師唯垂帷辭客讀書綴文以送半生耳近又所著朝夷巡嶋記數編亦欲倣華胥南柯之頻其第四編五卷昨既脫稿因題數行於簡端于時文政庚辰年余月念二日也

飯台

蓑笠漁隱

朝夷巡嶋記全傳中輯第四編總目録

第二十一條　容進士柳営　思故人軍監
第二十二條　屯成六牛山　開發鎮守城
第二十三條　拔城義士功　攘魔良將弓
第二十四條　祛邪妙藥方　賊類大奸計
第二十五條　浮雲富貴草　濡衣弟古鳥
第二十六條　陣営水醼盃　岐塹浄器舟
第二十七條　珪浦曲道人　田居中女僧
第二十八條　一二関攻鼓　四孝子怨刄
第二十九條　雲中鐵撮棒　腰間栗柄丸
第三十條　靈佛菜摘籠　豪傑葛藤索

本編五卷目録終其第三十條以上總題目見初編及第二第三編首卷繡像之右

水草太郎五
昌之
狗黨資
跖
鳳雛渴
堯
琴嶺
跖犬吠又
陰行

火牛未
放
山頭推
車
火牛既
縱
大克不
拯
鶴齊主人
珍浦五十五六
方相
城戸四郎武詮

丈夫志

相從俱憂

荒廟為福

接主復讐

守忠菴

琵琶

農夫

藁二郎

えんつうふ

圓通尼

奇計反間

似癡非癡

信天翁

題四郎

えびをのうせまる

海老尾加世九

清族無不肖子
名家貞育
名臣
雕窩麥

間中隼人守直

下河邊
小三郎高吉

是賊中賊
天罰奚遲

芳流舍

鐵猶矢藤五
重連

列傳姓名畧目追加

武臣　三善入道善信　秩父莊司重忠　佐味竺内高利

義士　城戸四郎武詮　水草太郎五昌之

隱逸　倍田二郎在義（一名浮槎道人）

賊徒　跖犬吠又陰行　象子彈平太貞持　悪別當訥愿

鵺夜叉　鵺夜叉　蛭富皿九郎

通計一十二名（この他、初編より第三編に見せし姓名畧目も、第三編の巻のはじめに載せり。）

附てはこの編纂は義秀ホ三友の再會ホ至て輟む省官只八當面ホ就て

これを推さざ。猶詳ならざるあり。そは義時の邪正光仲の得失義邦の

黜陟。義秀の是非ホこれをもとめたまふべし。第五編ホ解分べ。就中一段の脚色

次編ホ詳り。年々陸續刊行す。全本ホなきまでもとめよ。姓名略目追加終

朝夷巡嶋記全傳第四編巻之一

東都　曲亭主人編輯

中輯第三十一

進士を容て柳営

故人戍　思ひの軍監

建仁三年の春二月下旬北條相摸太郎泰時ハ多賀藏人光仲ホを伴て

伴て只管路を急ぐ程ホ太田の莊を出て第二日の巳の比及ホ鎌

倉ホぞ著ぬける。ここホ矢口を渡せし比より泰時既ホ帰著の注進その

ぞえあるけるぞこの朝。執權北條遠江守時政相摸守義時評定衆大江

廣元問注所別當三善入道善信ホ出仕て。太郎遲と俟ほどホ泰時ハ

まづ光仲主従を准備の旅邸ホ留て。柳営ホ參上て帰著のうし

十八日ぞ祖父時政待うけて躯く公文所ホ召入て。みづから文乃廷を

訊御ふ泰時答く。某一昨日。彼地ふ下著し。駿河前司ふ對面しく。御諚を傳へいひしふ前司答くまく。某既ふ隱道しく烏髮の沙弥くり。縱台命重しといへども今更弓箭を取ふべくもあらず。但し祖父頼政卿より相傳せし。雷上動の弓。水羽兵羽の靈箭ハ女壻ゆくいそ賀藏人光仲といへるふ讓與いひ兄彼光仲ハ廣綱ゞ類ふゆくゞ文武の智畧傑出しく。萬騎ゞ將ゞ為べき器なり。國家の為ふ賢を薦む能ゞ舉のひとのゞ是万民の幸なるべし。光仲をもく經任誅伐の大將ふ為さるべ廣綱則副將と為りく。陸奥へ進發せんとの議御許容ありて台命ふ応じて。即坐ふ頭髻を剪拂ひく抖擻行脚ふ出んのゞ他事もなくゆとゞ出べくもあらん稟せらるゝそ。某已ゞ出ぬ。彼光仲ゞ對面しくその才幹を試みるふ智辯言語ふ顯れく。その武略餘りあり。前司の吹舉虛言ふあらざれどもその意ゞ任しく。光仲を

招くまゐれり。ありれども廣綱ハ隱遁しく年を歷ぬ。ようや經任誅伐の副將ゞ為ん。とまうしたとものゞその功あるべしく鎌倉へかゝりて。ようく後代をゆるべし。數ありねども譜第の老僕間中隼人守直を召れゆとこれ亦謂ある兄ふ。あらねバ強くその身を伴ふ。唯彼光仲守直ふハ既ふ參上しく旅邸ふあり。夏の顛末件の如しとのゞを時政ゆくあくゞ。今ふそゞめぬ駿州の召ゞ仮ゞ拠も兄壻を吹舉しくその身の不參奇怪なり。ゞ賀とゆくん光仲とゆくん能ゆるゆ欲ありねども召れハ名をゞゆくことなり兄渠その素性をいかゞゆるめぞと問へバ泰時答ふ彼光仲ハ木曾の勇臣樋口二郎兼光が一子なり。兼光誅せられしとそゞ乳母の舊里なり。近江のゞ賀ふ世を潛び隱居の礼ようしく京なる寺院ふ偶居せしをゞ祖翁上洛の折住持ふそて鎌倉へ將て還りほとり近く使れし。媼子井平即これ。かくく彼人ハいぬる年刀野

時夏が讒言によりて、義邪義秀にとても一旦あるまじき罪人となりしかば、
身の措処なき随に武蔵の太田に流浪て、藍玉院に扶助せられし日、駿州
廣綱に便りありけん、竊にその素姓を問窮め、遂に六條藏人仲家の遺蹟
として駿州の養女を妻せ、迺ち賀藏人光仲と名告らせたり。又彼仲家は
木曽義仲の兄にして頼政卿の養子たり。又光仲に妻せたる駿州の養女
且見と呼ばるゝは仲家の女にて、又光仲は木曽の老黨、樋口二郎兼光が子なりと
いへば既に夙縁あるものから、駿州より見る所なくば豈慌てゝ婿にせんや。されど
ども婚縁は家事なり、漫に思ひ惑ひて女をもて妻せたりとも渠なからではと
なるざれば經仕誅伐の大將に吹挙せんや。その素姓はとまれかくまれ仲
家の遺蹟にして廣綱の女婿なれば任用せらるべきもの歟。某にこの義を思ふと
もて相見してそれへといふに、時政呆果て眼を睜り頭を反して且は[illegible]ぞ。

忽地小膝を礟と打て斑に脱たる歯を見して呵々と冷笑ひ、太郎は日来の奉
動に年歳より増て見ゆれども尚童でありけるが、彼樋口兼光は朝敵木曽が
股肱にして誅戮せられしものならずや。かれが件の光仲は朝敵の残黨なり。
よしや天地は反覆して弥勒の出世に値ふまでも用ひらるべきものにあらぬぞ。それ
のみならず光仲が媼子井平なられは一旦これに仕へしものゝ渠は如此この咎
あれば下野へ追遣りつ、刀野時夏に隷らしに、彼地より遂電せし。寔に
嗚呼の癖者なり。許もがれ奴ゆゑおもらねど。吉見冠者が等類も又不慮の
大赦にあひしを僥倖なるべきに、又駿州を誑惑して、その婿になりて随にあく
まで名をつけて世を欺きて栄利を揣る大膽無敵の癖者なるをさりとも
まかりては、なぞや又駿州もあやまりぬらん。彼奴を木曽の残黨といはでも
女婿にせし野心ありといふべからぬぞ。その胸膽を推さずしてかく加様非業に

斧鉞を授け軍兵を役せしめ。此度の大得ふせられなば経任をば得討ぞ。
二張の弓を弯げ弦を鳴し矢を放ち亦志ばべきぞと。井平奴を追ひ入せよ由を
ものたるの者ども。と席を拍て敦圓ハ義時ハ又元ると紙鑼く父ふ對ハ大人の
遠慮ハ然ることなるとも彼光仲を朝敵の残黨とせらるんハ聊道理ふ
恢ひぐ。とのぶ時政とハ亦いかふと眼を反せば。揖口二郎兼光ハ義
仲栗津野ゆく敷れ一後降人ふ形りく出ふ物をその比都ゆく
誅せられん判官の猜忌ふ出る疎忽なるべしと。ハ兼光ハ真の
降参なるぞと大姫君（近衛の姫君。遠ふ早世ぞ。）御追薦の放生小二位殿の御意とく木曽氏の残黨ハみか
思赦せられ。（義高ハ義仲の子。）
朝敵残黨の殘を以忌嫌んハ道理ふ違へり。且六條藏人仲家ふ木曽義

仲の兄ぞ。三位入道（頼政）の養子なり。宇治河の戦ひふその子藏人太
郎と共ふ平家の大軍を殺靡けく。父子陣頭ふ戦殺せり。かくぞその
後家ふ勧賞あるまじきふ光仲既ふ仲家の遺蹟なるあるべ。
経任追伐の大将ふ立さるるとも相応ふかぶるべきぞ。泰時弱冠なり
とハふとも柳営の名使なり。倶しく来まる光仲ふをぞ修ふ追入されるべ世の
嘲りをいふせん再度の評議なるべと憚ふ考へく諫ぶ時政ふ蛮乃
ど眉根とひそく沈吟ど。なるとも彼光仲ハ井平なりとさ。
ぞ家の奴隷なる東国ふ武士なるをさふ鄙芳のあれなるも追伐の
大将ふなるべそれそ世の胡慮なるあ。さハあるべと難ぞ義時
かるべく不ふ愚按ハいく異し昔前漢の霍去病ハ平陽侯曹壽が家ふ
ふやう。中孺といふ。陰子なれども去病ハ驃騎将軍ふ拜せ

らを匈奴を擊ちて大功あり。近くは天朝源頼信朝臣はいとゞめ摂家の家
令なりしれども。対位後四位上鎮守府将軍左馬權頭に昇進し。
内昇殿を許されき。武略神妙の聞えあり人を用ゐる実を取るべしゝ
虚名に惑されんや且光仲は従角の比より京鎌倉に浮浪しつゝ
らく大人に仕へんその願ひ果あらんか。夫潛龍のいまゞ時を得ざるは日
穴を蟬鰌と俱ゆるまゞ終に池中の物にあらず渠が大人に仕へ日を
その賢を考ずして遠く下野へ追退し今その賢を考ずといふこれを
沿用ひるは是愆を累ねるに家に仕へしめざるべし。
家の大任に當らんや。況こう家の譽にて他人の義を呼び加藤東國にて
名ある武士を甲乙と擇用ひて賊を擊せるんに再度の戰ひその
利なくは奥羽はいかゞ擾騒んかくて老功の勇士といふも又その基に

應ずべきや。光仲はこれと異に進て賊を擊て功あらば賢弟招くの道
をひらく。武を奬るの一術なるべし又その戰ひ利なくとも。さまでの御方の
傷損にあらざる猜忌の臆念をかくしのぶく駿州の吹擧に任せるべし。
安全の謀なるべしと言葉を盡して諫しぶ廣元善信感嘆して相州乃
異見道理に耦へり愚老はかゝる所もこれにまさるべし何ぞ夏の疑を
言上して光仲を召出し猶亦武器を試てその才あるべきを任用
あらまほしけれと衆一同に勸めしぶ時政は已ことを決せず遂に此に
隨ひて義時と共に泰時をおくまゞ尼御臺の方に廣
綱の吹擧。光仲の子義時はかゝる異見の疑なるもあく安えあげしぶ尼御
臺うち頷ずして婦女子のるのみ人を知るべきあるべきねども相州の
異見いと遷り公論とそいべき疾将軍家頼家亦安えあげくその光仲と

やうに用ひべきのみぞ。

とうのまへにてこそ。躰て將軍頼家卿ハ日夜淫酒に耽とうく政ハ親こゝろのまゝ。

百ことにつけてこそ定めなる。この時頼家卿ハ日夜淫酒に耽とうく政ハ親こゝろのまゝ。

或ときハ鷹を放獣を狩くくくくく遊山翫水の為ハ民の愁怨物ともせざりけ。

ときに鞠と繋と雙陸ハ興を催して酒宴遊興の為ハ國の費と者ども。

ときに奥六郡の戦乱いまだ鎮ざれども。

又光仲ハ

るに紙筆のけがれをみづから擇用のこゝろ。

ハ國の大事ハ執權北條一家ハ

ぞく尼御臺の決断ハ。この故ハ忠臣ハ遠ざけられて諫言の路塞り好

佞ハ時を得て諂諛の門を開たり。間話休題かくてその次の日ヨ賀藏人光

仲を召ハ。ゆるして登營を。間中隼人守直もそぶ後方ゆゑ従ひる廣綱の

名代ハ。ゆるして見ゆる。執權北條親子ハ。大江三善の評定衆和田

畠山。比企三浦の諸老臣。みな營中ハ参會つ既ハ。頼家卿山鳩の間ハ

出ましまへ。尼御臺も亦光仲を御覽せんとて翠簾の裡ハ。

その支の為体整ひ齊とく。諸士禮服の色ハ秋の林を染るが如く。

又烏帽子の高低ハ春の山の連るハ似たり。程ハ光仲ハ花田の素襖ハ

掛烏帽子にて。黄金作の小刀を佩。進退ときく作法を守りて。間中隼人を

従へて。泰時ハ導れて。遥ハ平伏する。程ハ泰時ハ謹て。その姓名を披露せり。

當下問注所の別當三善入道善信豫て仰を稟うけ。班とゆく光仲ハ

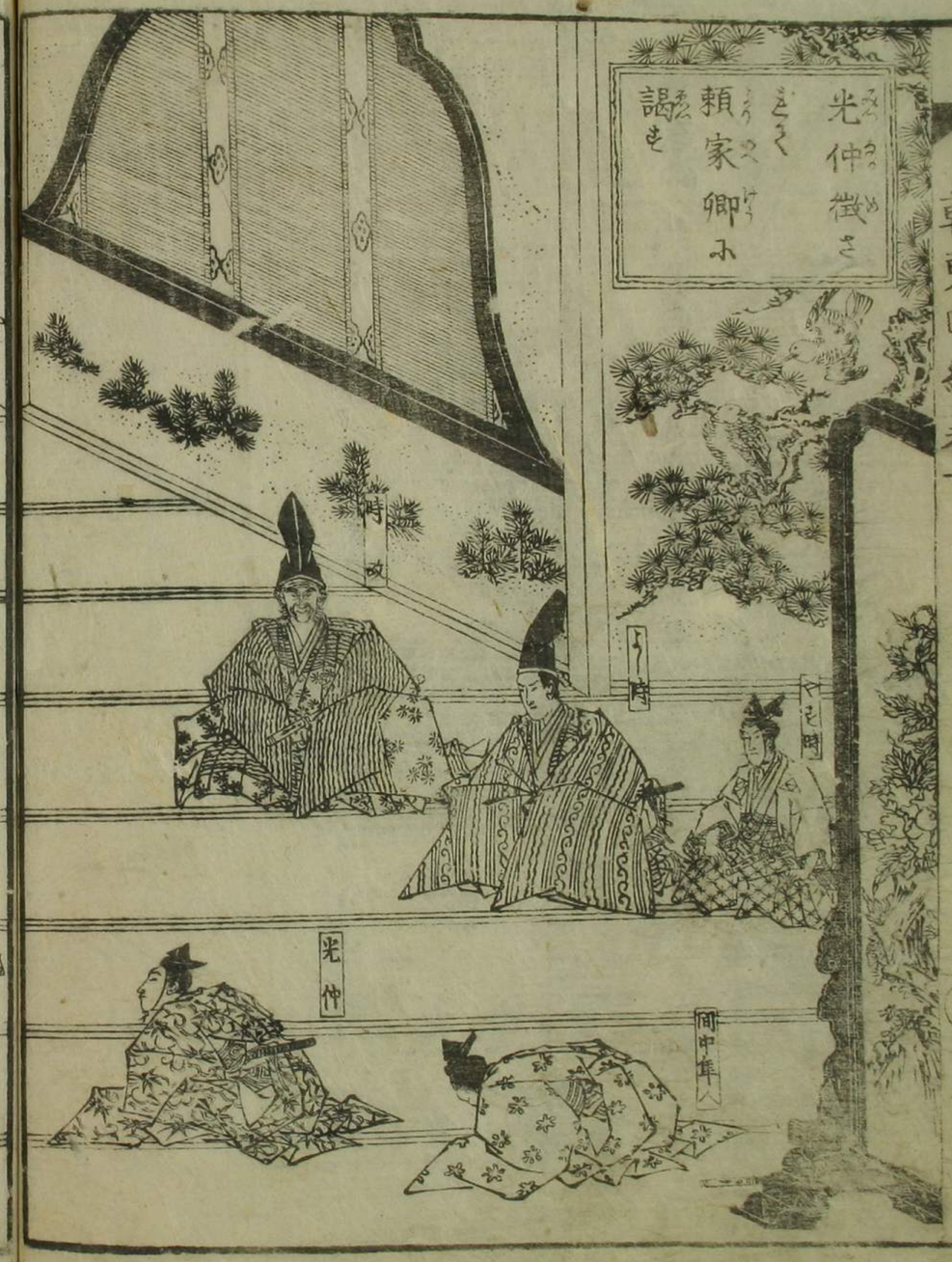
うち對ひ駿州ハ隠遁の義をのべ。此度の参府を辞しまゝ和數を

薦まゐらせて。條間食ハ。ゆるゝ呼べ。あれば善信仰ハとゝく聊和數ハ問ハ

ことゆゑ。經任ハこの五千来六郡を掠奪して。矢種兵粮ハ富りとゝく。

ると速ゆゑ。對陣時日を累ぬるとゝ。御方ハ兵粮遂ハ竭て是主客の

尼御臺
頼家卿
佐味ち内
ひろ元
重忠


光仲微さ
とく
頼家卿ふ
謀を
時政
ト子内
ゆ子時
光仲
間中年八

勢ひおのづから然るあゆゑなり。故左典厩足利義兼の功あるゆゑまこと
よまとろかれば彼経任ハ寔ふ烏合の山賊なれども侮りがたし所あり。
和敵甚麻之ろ謀ろあろ軍慮の大意ゆゑなり。と問まく光仲袖ろ
合せさンい謀を帷幄の中ふめぐらしく勝を千里ふ決するあれ之良将の
うふあり。光仲いかぐ賊の強弱を見ぢのまぐそ地理を推究るふ暇なし。
唯居ろぐるあり勝敗を未然ふ訣るよしあらんや。ろうまどとも順ろめて逆と
討ふ克ぢとのふとあるべうまぢ。左典厩の功ろうまへ御方ふ野心のあるく。
軍略合期せざればあらん夫天の時ハ地の利ふ如ぢ地の利ハ人の和ふ如ぢ。
一人必死を究ふ百人これふ敵しく十人必死を究ふ百人これふ
敵しぐく百人必死を究ふ千人これふ敵しぐく千人必死を究ふ
萬人これふ敵しかし。宜ろ戦の場ふ臨く生んと欲るあゆ亡び死せんと

欲するあゆ生く兵を寔ふ因器ろうとの故ふ三軍ふ将ろあゆ獨功を貪
らぢ苦楽を士卒と倶ろく軍令を正うし賞罰を明ゆくこく死士を
養ろふあり。孫子の地形編ふいはぢ卒を視ること愛子の如くを故ふ倶ろ
死まぐ。九地編ふ又云三軍の衆を犯ること一人を使ふが若くもこと
亡地ふ投ぐく然後ろ存をそれを死地ふ陥れく然後ふ生といろ兵と
行の要彼を知り己を知ぐ必克彼を知く尚己を知ぐ或ハ勝或ハ
負彼を知らぢ己を知ねぐ戦ふ毎ふ必負く。是孫氏が誡る所ゆく攻伐の
要領ろり。かれぐその軍器ハ今ていろく説まぐ。一ぐ賊塞ふ臨く
その地理を考へ屢賊兵を誘ろく。その虚実を察し機ふ臨ぐ変ぐ応ぐそ
短兵急ふ拉ぐ経任幻術ありとのふ。その氏施をふ暇ろるべし寄正
毎度ふらく當く速く賊柵を拔ぐ矢種ハ我有ろう渠ぐ兵粮の

多く侍ハ即御方の資なり。こゝ故かく某ハ兵粮の續ざらん事を患ひとせり。只經任が首を獲るの一日も速ならん事をおもふのミ。是併君の御威徳に依るものなれバ。吶に才学を演るにあらず。尊問黙止がたきゆゑに卿愚意をのべ候のミ。過言ハ許させ給へかしと恭しく答しが。善信入道ハさらに将軍御母子をはじめとして大江和田畠山の諸老臣みなく耳を側てその宏論に感服し。現廣綱の吹挙。私情にあらず。經任追伐の大將ミな宜人にてありけりと思はざるものなかりける。その中に時政ハ目を斜にして光仲をとミかうミると半晌ばかり。その人がらの美しきその辯論の爽なる。絶てむかしの井平ならず。渠いつの間に習諳しかく逞しきものなりけん。寔に人の才ハ揣りがたきものなりと思ふのあまり心に噵くて。かたはらの知るべくもあらぬを義時ハその氣色を察して廣元に目を注されば。廣元

もかくその意を得て。同列に會釋しつ各位の方を見わたし藏人の才器その任に當れり。萬率ハ募易く一將ハ獲難し。任用せらるべきものゝ所存を申上られよと。ゆくりなく義盛重忠に辞ひらしく嘆賞し。彼人の義論甚よし。駿州これが副となるべく功成んと疑ひなし。薦揚勿論にやと衆一同に応しゝバ。時政ハ已ことを得ず驚くものから前に來り。衆議の趣を執達し。且く奉る旨ありて退きし光仲にうち對ひ。前駿州の婿たる賀藏人此度その薦に因て即進士に擬せられ新に御家人に召加て經任退治の大將に仰付らる。駿州と共に奥州へ進發なして巳なき功を奏すべし。これによりて武藏下總の守護御家人等にハ別に御教書をもて伝へん。もし軍勢催促して召領して發向せられよ。但し光仲官職なくして大軍に將たらんハ東國の武士侮りてその軍令に従ふもの稀なるべき故よりて今假に外從六位上に叙し藏人と

ありしが。叙爵のなき使者として京都へ執奏せらるべきのめと宣くこまでを存ずべしと厳に命を使へて又守直を召近づけ此度藏人をゆるく經任退治の大将にゐんとの立ましき處を上げて駿州の乙やうくさろくに依らせめいり。かくれバ駿州これが副として大功を立るべし。台命既にかくの如し。罷りてまづ主に告よとひとしくこれ彼にのびよて守べ光仲守直唯ととして恩命と拝謝せる當下光仲ハ席を避て額を著し某草莽浮浪の身として不慮に御家人に召加らる。剰此度の大任を奉るのみなく毫末も功あらざるて過分の冠位さへ貸下さるゝ條莫大の栄にて恩命今更辞し奉るに由なし。されバ犬馬の労を彈して日ならず逆賊を討滅し寵恩に答まつらんなり。勿論にゆへども任重るさバ妬忌あり市に三虎をなすとのめあらバ労してその功なかるべし。願ふて軍監をあらし進退をしくゆと希ハ

まづ得にゐん頼家卿聞せのゆく光仲が遠慮その由あるを誰をかあるとて宣ふ程にかる佩刀に候したる佐味笠内高利頓首なくまうしけるハ某ハ往歳蹴鞠の技をもて側近く召使れ鴻恩微軀に餘れどもさせる御用に立よりもなし。よつて請ひたる光仲に隷として賊地に進發せしめあらで鋭を撃堅を擘ぎ斬生の埋草となるまでも忠勤を励む。某加比に人とありく奥の案内をもしれども下野なる学校にて留学しそれ吉見冠者義邦と学窓に臂をまじへし一面の交ありて冠者ハ謬て賊の為に擒となりて存亡定かならずと聞り。かくれバ某進んで賊を殲し光ハ君の為に害を除き友の為に怨を復ん公私の情願この擧にあり。御許容願ひあると名ひへて請ひまうしけれバ頼家これを見てかなく現光仲ハ今大任に當るといへども原是一個の匹夫にして幕府譜第の家臣にあらざれば

その軍監ときこえる。鎌倉武士はみな羞べ。兵内が所望時宜に協へる。
べ。と思せ。ゝ。廷佐味兵内を軍監とす。光仲ふと俱に陸奥へ道も
遥と仰出され。光仲廣綱に御教書を賜つ。征伐進退その意に任
せて。大功を立べ。と再ゝ命せられゝば光仲守真恩命を稟て
直に遠侍に退けり。かゝこの日當坐の老輩及當番の者侍まで。
光仲が俗なるに来ゝ。姓名を告かゝ。慶賀を述るめ。要時は引も
切ずるき面目身に余まてぞ見えける。その中に時政はこそ窃に
恥さとけん。光仲を尻目にうけゝ。これとも知ぬ面色をされば光仲も。
鎌倉に逗留の程軍議公務に与ずらひゝ。執權の邸に対面と
請に折も時政はこそ外ゝ。ゝ。歎待ゝ。昔年のる恩いの出ぞ又義時は
泰時ゝ。光仲を問慰めいとゝ懇切ゆゝ。ゝ。待ける。光仲は是彼の親

疎ふ。ゝ。ゝ。執權のつれなげなるはそのまゝ察ゝ易ゝ。相州義時の
真實ゝ。ゝ。はその胸中揣ゝ。されば此度の大任は幸ひに似て却
危ゝ。前司殿廣綱の隱遁は故あるけり。と彼に就ては毎度に
いゝ。ゝ。慎けり。是ゝを先に間中隼人を召命の趣を廣綱に
告ゝ。ゝ。後者を招ゝ武藏なる太田の莊へかゝり去り。光仲はその日より
佐味兵内が第に移て軍兵をまつ程に兵内は光仲の人柄と景慕
ゝ。ゝ。窃に思ふ志を説示ゝ。又義邦の度をゝも折に觸てはいひ出ゝ。
光仲も豫てより兵内が名は世つまづその人とゝ。ゝ。推ゝ。学問も
大ゝ。ゝ。忠義の壯佼ゝ。ゝ。渠が遊藝をゝ。ゝ。賴家卿に仕ま
つゝ。その本意はあゝ。ゝ。とゝ。猜ゝ。疑ゝ。下野ゝ。ゝ。
義邦のゝ。ゝ。賀光ゝ。朝夷ゝ。去年の暮春の三日の夜に。

勝澤の松原ゆく時夏ゆを防留めくる夏の綸まゆ義邦ゆ別れし後の
うぐう人さん憂驩若樂幸不幸。まぐくおちうく物ぐまぐ公二内ハ義
邦の薄命を嗟嘆しつ。且懇ゆ官途ゆ進ゆく。さ彦豪傑の圓居ゆ
得値つぐ。逐臧允限りあり。ちうんあまぐぐ。此度の軍ゆ後へと月来の
素懷ゆ稱へつ。彼人擒ゆなるぬとも。ちゆ悉ゆあうんゆハ義をうんく
やちもく勇ゆあるを火急ゆ柵を攻破うハ再會その期あるべーとく頻ゆ
軍兵を催せぐも名ある武士ハ光仲ぐ下風ゆ立んことを恥てその催促ゆ
從ハぐ。十日ぐうまを歴る程ゆ武藏下総の端武者百五六十騎纔に
參集ひーぐ。今ハ何日まぐく俟べ死とく。光仲躰く出陣と時改まぐ告ゆ
けり。ちうれぐまを頼家卿ハ日ぐうの醼醉ゆまうて聊不例ありうれハ再て
見參ゆ入うゆ及ばぐ。廣元善信奉りく軍用兵粮の下知を使へその

日ゆん暇をまうりーぐ。光仲ハ次の日の未明ゆ件の軍兵をわく。佐味笠内
高利と共ゆ鎌倉を辞ーちうつ。その明日の曛昏ゆ太田の荘ゆ馬を
ちまぐぐ廣綱も豫てより出陣の准備ーく公二内高利ゆ對面ー一日
人馬を休めさせく。衆一同ゆ進發を老うあハ甲乙と。且見姫ゆ隷
らまく荘院ゆ留ぐう。その他間中下河辺加世允ゆハさうちり一郷の
荘客們も廣綱の德義を慕ゆく。血氣壯あうあぐもハ招ざれども
從ふあうう。まゆ二百騎ゆハ足うざりけり出陣の規式ゆ別の情状ハ説
ぐ。ちゆ想像ぐーさる程ゆ光仲廣綱ハ途をぐり軍兵を催促ーとく
すうぐ日来經く。陸奥の國府ゆ著ーぐ。五百餘騎ゆぐうゆけ。

中輯第二十二

屯成六牛山
閑裴鎮守城

三河賀進士藏人光仲は五百騎ゐ過ざれども勝負は兵の多少ゐ
よらぬ速ゐ寄近づかく賊の虚實を察んとゐ廣綱この議ゐ隨ひて
疾く國府をうち起つ五百餘騎と二隊ゐ分けく光仲を先鋒とす。
廣綱は後陣ゐ打せく。夜ゐ宿り日ゐ進む賊の大將蘇塗鶏東二
刀野時夏ゐ防ぎ搶籠る鎮守府の城ゐ程近き六角牛山の麓なる
要害の地ゐ屯せり。是より光廣綱は諸軍兵ゐ示さんとて年来
弓箭を捨く栄枯の際を脱離せり。此度の副將なるあゐ已ゐ紙
得ざるの義なり。光仲が智計は廣綱ゐ過ぐると遠し。更ゐ助言ゐ
及ぶべく。渠おのづゝ武畧あり。當家相傳の弓箭を既ゐ
他人ゐ讓与ゐる。經任幻術あり。これゐ靈弓神箭の德山立虚かゝ
んや。支皆鎌倉殿のあん為なるべ。おのく一致のこゝろをして軍功を勵む

べゝと説諭しく。ゝ。光仲ゐ任せゝり。されども光仲は自己の才学ゐ誇
らぬ必まず廣綱の旨ゐよりく事を行ゝと欲せゝ廣綱とめて後りぬ。
凡大將なるあゐ賞罰をづくゝのゐ天子將軍の仰とゐ
用ゐざる所あり。和漢今昔三軍ゐ將なるあ副將軍の指揮を受く。
支を行ふよゝわらんゝ攻伐進退和殿の隨意なり。廣綱ゐ問ふと
制しく。とを聽さをけり。この支の趣を軍兵ゐ傳へく。駿州
かくの如し。大將不測の軍略あらんと憑しくあり。絶く
侮るあゐなゐ光仲は。是は礼儀を正ゝく士ゐ下り。賞罰を明ら
ゝく。これを將ゝけば士卒みな歓びく為ゐ死んぞ樂ひるべ。されば
又光仲は鄕ゐ鎌倉をうち起く馬を太田へよせし比竊ゐ海老尾加
世丸ゐ謀を授くゐ。汝は世丸。ゝ利る兵十人をゐく馬商の

模様を打扮。間道を走る。経任が厨川の柵を起る風いと烈し。日を
俟くその兵粮を燔うしを追伐の軍兵よりもと。経任口いその前
鄭ぞて後の戍を等閑なんよくせよと説示せば。加世丸はところ為果て
馬高を打扮つ。諸軍兵を先ところ陸奥へぞ赴る。さ程
鎮守府の蘇塗鶏東二暴道を追討の大将寄ると。俄て間諜の
兵を遣しつ。敵の虚実を探らしむる。此度寄手の大将は駿河前
司廣綱の壻多賀藏人光仲といふ。あふ〳〵廣綱と〳〵が副将う。
その勢絶を五百騎ばかり過べ。既を切処とう塞ぎく。六角牛
山の麓に屯。その告ありければ暴道躯て騎馬を平
泉を立て。経任を注進し。俄を四門の戍を倍く。刀野時夏を
集合その夜曩に足利左馬次義兼累世名家の上将にて数

千騎を引く。寄せ〳〵を平泉を火攻せられく。只一戦を利城
喪ひ立足もなく逃亡る。況て此度の大将多賀と名ん光仲
とあん名をぶる。ぶくとあり〳〵の戦を。その〳〵たるにあらく差く道世
久ども壽永元暦の間源平の戰に源氏の類族とと
さしあるべ。その本意推く。そ〳〵加以その軍兵は五百騎を過ぞ
とのへば。そ〳〵を足るのあらねど侮るとは悔あん。そ〳〵を敵のよ
るやもく。そ〳〵の隨を防戦ひその兵粮の竭るを及く。撃て出るあの
あらば一騎も生て還さんや。防禦の術肝要。その部は如此。
軍配を定むるぞ。時夏はこの月来暴道が下風をとのと打
そ〳〵をりく。今その軍議を聞あくを扇を挿く。佶と見くの鶏東二
怯しる欲。吾們當城の大将とく。五百餘騎を龍らまて。を間近き

暴道時夏軍議を角
刀野時夏

敵を追ひ拂はんと居たりしその鋒を受んと後難いとゞ脱るべき和
殿はとまれとくもあれ時夏は當一當に寄るを白沫吐せくれんられ
と云へども徒はなしこの様に従はれよと敦圍たるく論ずるべき早雄の賊
兵は大きにあらざる雷同し刀野殿寔に然る敵も五百騎味方も五
百騎牛角の勢ひあり城下を蹄よりけさせんや誘めんといさ
ふを暴道急に推禁めこれいふを謀の軍かせそ只今生く戦わ
寄るの望む所なり枉てこそ意に任されよと禁めても留らと時夏は
呵こと冷笑ひ寄るは既に長途に疲労し不知業内のあれそあれ
逸るべく労を撃べきを克ずといふとあらん時夏が志は則衆人の
ならそ衆議は是聞ふつくしそよりは一応益の食議は時を移さば主
客必位を易んみに立ずやと罵驕げは暴道怒く声荒ふり立時夏

傷若無人なれ苟も當城の大将なり一已の功を貪りて軍令に背く
あれは斬らん若且ずは生く戦んと欲するものいとヨスにあるべし制しがたし
進く敵を撃んとあるべしれ亦一計あり鎮りて安ずるとめらやく嗜く
制するべ時夏僅に亂式おさめく舊の席に著よけり當下暴道は
時夏に向ふ数ひ生く敵を撃んとこそ意ゆはあらねども衆望も
亦黙止がたし若べ太郎は三百騎をねく六角牛山の色を鎧べ敵
に向ふ必斥候あらん城より逆よりと笑ふべ色を釋れ逆進して必合
戦するべ輕く戦ふく偽員く敵を誘へられは百餘騎をねく
龍蛇茂林に埋伏せそ過ぎ後陣戎撃ん太郎も一軍として
返しく挿く攻撃べ一戦必勝疑ひ無し若べ敵もその伏兵あれ
と式察しく佛しく逃るを追ぶ物ふるべし城に入るべし寄る本

陣に還る比へ途めく日は暮れぬ。日没に及ぶ百騎を招く。潛に敵の
跡を尋ぬ。夜に紛れて風上より火を放ち色々燔ぶ備をなすに暇あらで。
敵兵必乱れ騒ぐ太郎は又黄昏より三百騎を招く城を出遥に火の
光を見てこれ走る六角牛の色に推寄せ横ざまにその逃る後を光仲
廣綱翔りて鬨を唯一つ擒に者ども時はなや未の下刻に出陣既に
その期に協へり。とはいえども時夏には悦いまして腰兵粮の准備し。
俄頃に城の東門より旗を進めくうち知れば早雄の賊兵三百騎時夏に
後ろ六角牛を望て寄せんとその元暴道は賊兵百人を留て城を
守らせこれ身は百餘騎を招く潛に西の城戸より出て城を去ること十四五
町。龍蛇茂林に埋伏して敵の過ぎを俟て程に進上藏人光仲は
この六角牛山の麓に屯して賊の動静虚実を

窺せこの日廣綱高利を招き守直高吉に聚合て合戦の後を問と
一人佐味高利ぞ申す。某昨夕六角牛山に登りて遥に鎮守府乃
地形を考へ在暁の月は出るまに平泉の方を眺望するに
なほ猶遠く東北の方に當りて天色赤く然も昨夕は甲夜より
東南の風烈しく吹て經任が平泉の柵に厨川に裏あり。
遠く路遠ければ方角や否定ふと成知りがたしとの光仲微笑て某も
亦これを知る。是則別事に非ず海老尾加世丸に窮に厨
川へ遣せ。渠は彼処よりその兵粮を燔るべし。厨川乃
柵を經任が根城に武番兵粮は其処に追伐の軍
兵むらに及び根城の兵粮焼亡せば經任は疑惑て反忠の
あるとぞ是いまだ賊と刃を交へ折あり。

その謀を云云なりと密かに説示せば、内高利をさそなり。守直高吉ホ、みかその武器感佩せり。折しもあれ山風颯とおろし来る。陣門ホ建うりける鉾識を吹断く。鉾ハ西へぞ傾けける。衆皆これを見て奇一色を失ひつ。こハ必御方ホ利あらじ。あホ忌しやと思へどもありしかども黙然たるもそぶ中ヨ廣袖ハ騒だる氣色なく、藏人今山風の鉾を吹傾けしハ。そもそもそのあるべきと思ふ。知るやと問ふに、雲時、沈吟して曰ハ。今一陣の狂風ハ東北より吹来れり。便是賊の大将ホ、揖龍る鎮守府のうしホ直ち。かまへ賊兵數を盡して逆ふせるる兆なるぞ。欽先人を征し。後ろ人を征せる。然らばなほ一先逆撃べ必利あらん尊意如ホと問ふ。その辞のまゝ訖らず。斥候の兵走還つて大床のかたホ賊軍一隊三百餘騎ばかりを望みよせ来れり。間世町ゆハ過べ。防禦の術と急せ人と喘ニ生るホ廣袖ハ。てうち頷き。さまべ。そ藏人が計る所ホ過ざりしを合せの戦ひも物よく軍配せらるるよといふまでく光仲一議ヨ及ばず。ひたすらゆのね某ハ三百騎を率ひて先鋒ホ進むべ。大殿ハ百五十騎を率ひて後陣ホ續せるべ。欽某豫より地図を考ゆホ鎮守府を距ること十四五町ばかり。龍蛇茂林といふ切処あり。樹立隙なくまべ路いと暗く人馬の進退不便の地ニ彼蘇塗暴道ハ經任が軍師ゆく。智術あるかとぞいふるまべその先隊をなれを誘ひ伏兵をもて撃んとする欽易ゆるホ三巽を風とし木とす。巽ハ辰巳ゆく。且風木と象まり。さまべ今の狂風の鉾を傾けるをゆく。その吉凶悔吝を推しハ。龍蛇茂林ホ伏兵しく。不意ホ起て撃んとて計るゆ賊の策ホ就く。これ亦謀あり。下河邊小三郎ハ

五十名の兵を率ひて間道より窃に進みて彼社の後に遶て出て賊の
先陣敗北せば。其後彼此に火を放て伴の社を燔立て賊の伏兵
ありといふとも不慮の猛火に遽迷ひて。その謀合期せざ渠ぞ偽の
敗軍に真の敗軍と称ぶべ死こそ。とくといそぎ立て高吉に告ぐ
べく。五十名の兵に。その謀を使へ。准備の火藥を推乃て志のびくに
山下路の捷徑をもとめてぞいそぐ。軍配既に整へ。光仲に三百騎を
三隊に分けて佐味高利間中守直に左右に備へさせ。鞭揚縄り。
馬乘出せば。廣綱に百五十騎を率て。徐に後陣に續かく。光仲に馬の
足搔を早めて。ひくと十餘町ばかり。果して前面に賊兵あり。両軍
礮と撞見とり。間近くなるまで。佐味笠内高利に馬を陣頭に乘
進めて。為るものに誰そと問ふ。當下賊將時夏を鎌乃上に大荒

目の鎧を黑く備前長刀の鋼さぐりに菖蒲形なる反に挾み鹿毛なる
三歳駒の太逞に雲珠鞍置て打乘まる。三十六騎の賊卒を前後
左右に従へて。徐と進み出る。鎮守府守衛の上將刀野太郎時
夏に汝が摸様大將に。あくまで。説論をば。光仲廣綱とて出
せと声高にゆゑ。鳴りて。且くして。揔大將光仲に長巳頭に旗を進めて。
徐に馬を乘居とれ甚麽なる打扮ぞ。但見る花曇織の鎧直垂に。
小櫻威の鎧の尚已時なる紋遠間もなく著下して銀の磨著の臑當に。
精好の奴袴を張らせ。小鶴とて。五尺三寸ありける駿馬に遠山形を
金具に磨きて鞍と置て。歩冬色の厚總懸て。二十六差して。大鳥
羽の征箭を。背高に負て。兜をば士卒に持せて。面とりはせん為に
著ず左に。當家相傳の雷上動の弓の真中を握含。右に紫竹の

光仲軍頭
時夏
罪悪を責

光仲

佐味ち内

間中隼人

時夏

鞭を揚く。時夏をさて招く賊將時夏ときなりや。こはこそ追伐の總大將從六位上ヨヌ賀藏人光仲ぞと高声ふ名告さる左ふ間中集人あり。右ふ佐味笠内あり威風凛然意氣揚々四下を拂てゐんえーうば御方も敵もおーるべく。適微妙ぬ大將やとおりうぬのうけも時夏を睛を定めく敵の大將を熟視るふ誰ぞえんヨヌ賀藏人と名告さるへ。媼子井平ぞをくまび驚ぬ惑のく胷塞ぬ怒りふ沼堪を声を激ー。此度寄ぬの大將を何人うとおのーふるぞ家の奴隷ぞりー井平奴であをけるー汝ハ下野ぞ存りーぬ主ヨ叛ぬく義邦ふ内通ー克殺ぬく逐電せー。不忠無慙の匹夫ぞり。頼家暗愚の主ぞとぞるでふ汝を立て。数百騎の大將とぞぬ。ふ同氣相求る亡命流浪の徒ぬ驅催ー。追伐の大將と偽ぞく義邦が為めぞ怒ぬ復ぞんと計るぞん。

ぞ及ざる役倆ぞ項を洗ぞく刃を受ぞと敦團逼ぞく罵ぞび光仲靦然と打ち笑ひ汝ハ人を不義ぞく飽まぞふ罵ぞるその身の不義凶悪を知ぞるどや曩ふぞ北條殿の旨ふ任せく汝ゲ家ふ身を寓ぞども素より正ー分主役ヨあぞどその賊情を諫ぞて遂ヨ邪を祛り正ヨ就ぬ今や天運循環ーく廣綱ぬふ吹挙せぞ鎌倉殿の御家人ぞく逆賊追討の大將ぞり。汝ハ是恩ヨ背ぬ德ヨ恃り。足利左典厩を欺ぬて媚と經任ヨ徴めるその凶悪数个條ぞ枚挙るふ遑あらど衆悪ぞきその身ふ聚ぬ寔ふ不赦の大罪人天罰追ぞぬを知ぞ咒を脱ぬ。ぞ束縛ぞく縛を受ぞて讙ぞる時夏ぞを仰ぞ怒ぞく左右を見ぞり。彼生拘ぞと下知ぞび血氣ぞ謀の賊兵ふ向ぬ咄と發ぞく箭を射ぞ鉾ぞ舞ー備を乱ぞく競蒐ぞび守直高利二隊ヨ

引き揃へて、二百騎を魚鱗に備へ鶴翼に擬合せて、火水ふるゝと攻さうる。勢ひ當りがたければ賊軍忽地に閧を靡かせて八反あまり引退き且戦ひ且支へて敵を誘ふと數町ゆく龍蛇茂林ゆゑ近つけることの時日ハたちまち没果て天ハ陰霾して平日よりも黄昏ゆゑ時分ハうと時夏ハなほゆゑ霎時踏とゞまり戦ひのまゝ十合ふ及ぶと刃を引き逃走る高利守直馬を飛ばし蓬ゝ返せと追蒐るかゝる折しも暗號とあぶえて寄手の陣ゆ一道の烽火閧を沖る程にてあゝ龍蛇茂林乃後の方より猛火忽然とめえ出る勢の莫少ハ定らぬふねど谺ゆ響く閧の声大地も崩るゝ可きく草を撲箭を射ゆ駈立て進む程ゆ時しも春の季なれば夜ハ烈しく山下風ゆ衆木一圓猛火ゆ焼まてく昏ゆるもの明るけれゝゆゑ隠れく敵を待ゆ蘇塗暴道大ゆ駭き商敵遣を過ぎゆ暇なく百騎の賊兵俱共ゆ遽く樹蔭を出しゝ高利守直ハ彼引包で撃留めとまるく進ぐ戦ふほどゆ又茂林の中こうして下河邊高吉ハ五十名の士卒ともゆ煙を犯し途敵横断アさ一挟く撫さんとけれゝ時夏暴道辟易しく之彼ひとつゆ辟さるゆ前後の敵を防ぎゆく路を求めて脱んとを當下光仲麿ハ揮う軍ハ十分勝ぶでかれくと下知ゆ將火を勇將の下ゆ弱卒あらねゝ衆皆先を爭ふく奮撃突戦せざるもあれよ廣綱も又後陣を進めく三方ゆ撫合せ漏さまじとぞ雖立ゆいとも烈しく戦ひゆ賊兵ハ度を失ひく或ハ騎馬ゆ踏殺され或ハ已ゞ大刀長刀ゆ辟れさゆく刃敵脱ぐあハ煙よ噎び鎧よ焼まて屍ハ累々とく岳の如く血ゝ

滾々として川ゝ流るゝ程ゝ四百餘騎の賊兵ゝ大うこゝのゝ乱れ
ゝ暴道時夏も数个所浅瀬を負ふ。絶ゝ九餘名を引ゝ稍
活路ゝ開ゝ城を投ゝてぞ走ゝる既ゝ暮ゝ寄ゝの
軍兵ゝ間遠ゝ暴道時夏ゝ久ゝてゝ吻と息ゝ
馬を府城ゝ馳ゝ暫の橋ゝ立駐ゝ城戸を開け。と呼ゝ年尚
少ゝ武者四人城楼の窓を颯と引ゝ暴道ゝ
ぞ当城ハ吾們既ゝ乗取ゝ。疑ゝ名告ゝ
井の領主信夫荘司元春ゝ家臣ゝ水草十郎昌甫ゝ子太
郎五昌之城戸三郎守詮ゝ弟同苗四郎武詮ゝ君父乃恥
雪ん為ゝ撃残ゝ。古傷輩の義士ゝ
陣所ゝ推参ゝ志ゝ述ん

為体ゝ。ゝも窺ひ知りゝ不意ゝ起ゝ当城を攻落ゝ
賀殿ゝ見参の牽ゝ物ゝ進ゝ物足ゝ
みゝ贈り来ゝ欲みゝ撃留ゝ
咄と畳ゝ。箭を射ゝ
射殺ゝ五人深痍を負ひゝ暴道時夏ゝ
句の間答ゝ及ゝ馬の鼻頭を牽ゝ
高利守直高吉ゝ士卒を驅立ゝ
ゝ賊兵ゝ一個も残ゝ
辛ゝて落延ゝ霄間ゝ暫の往方も
ゝ馬疲労ゝ。再ゝ
備を乱ゝ馬を進ゝ鎮守の府城ゝ

同志の兵ゐ生擒を牽立させ城より出く。光仲廣綱ゐ名簿を呈し。水草太郎五昌之とも謀をりて當城を乗取らんと企く製取つる。衆賊の首級を実撿するぞ入まとゐけゐ。そうれども光仲まそこの用あれを疑ふく。えびく質問けるゐ信夫荘司が餘類ごると既ゐ證跡分明あるとぶ。ふく欺ぶく。その忠孝を稱賛し。生擒の賊兵ゐ武誅戮しく。みゐ首どもを梟させ。廣綱侶共士卒をゐるく償まく城ゐ入る程ゐ水草太郎五昌之ハ三十名の兵とも城戸を開く迎けり。畢竟武詮昌之ホ。ゐるる謀をりく。輙く城を乗取るそそ次の巻ゐ解分るを見くまそん。

朝夷巡嶋記全傳第四編巻之一終

吉田屋
吉田屋
明治文庫